
異世界乗っ取り計画

使徒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界乗っ取り計画

【Nコード】

N5901N

【作者名】

使徒

【あらすじ】

ある日、車に衝突されて死んだ少年、霧島大和^{きりしまやまと}。主神ともいえる神様に興味を持たれた彼はチート能力を貰い異世界へと旅立つ。

大層な題名ですが果たしてそこまで行ける（書ける）でしょうか？・・・ぶっちゃけ試験勉強という現実から逃避するためにノリで書いた作品です。なので、先の予定はまったく決まっておりません。

< 作中で使用したものの原作 >

この作品では、様々な小説・マンガ・アニメ・ゲームから人物・技・設定・世界観などを使用させていただく予定です。

しかし、原作名のところには入りきらないためここに記させていただきます。

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

テイルズシリーズ

鋼の錬金術師

コードギアス

ゼロの使い魔（予定）

カンピオーネ！（予定）

とある魔術の禁書目録（予定）

とある科学の超電磁砲（予定）

ドラクエシリーズ（予定）

魔法先生ネギま！（予定）

戦女神シリーズ(予定)

スターオーシャンシリーズ(予定)

遊戯王(予定)

FFシリーズ(予定)

銀河英雄伝説(予定)

ガンダムシリーズ(予定)

ブローグ チートっていいよね（前書き）

やってしまった・・・『ニートになりたい神殺し』の連載もあるのに。

え、資格試験の勉強中、気分転換として書いてみた作品です。資格試験を無事終え『ニートになりたい神殺し』の執筆を再開しましたが進捗具合が遅いため、この作品を投稿してお茶を濁そうと・・・いえ、何でもありません。

ブローグ チートっていいよね

ここは・・・何処だ？

・・・

え、少し情報を整理してみようか。

俺の名は霧島大和きりしまやまと、月城高校二年生だ。

両親はすでに故人だが、宝くじの当選（両親が生前するとき）と多額の保険金で生活には不自由していない。

さて、今までの行動を振り返ってみよう。

AM 8：10 目覚まし騒ぎ立て起床。この時、目覚まし大破。

AM 8：15 朝食を・・・食べる時間は無かったorz

AM 8：20 家を出る。

AM 8：25 信号待ちうぜえ。あ、車が突っ込んで・・・

・・・

えっ!？

俺、あの暴走してきた車に撥ねられ死んだ？

てことは、ここは死後の世界かなんかか？

数億ある資産を使ってこれからダラダラと過ごそうと思ってたのに、ほとんど手付かずじゃねえか！

こうなるんだったら、もう少し贅沢しとけばよかったぜorz

「ほっほ、お主はなかなか面白いの〜」

俺の目の前に人の良さそうな爺さんが現れる。

「神様ですか？」

「うむ。まあ、神といってもピンからキリなんじゃが、わしは最高神とか主神といった表現が的確かの」

「それで、青春もニートも経験することなくあぼ〜んしてしまったらしい俺に何の用ですか？眠いんで簡潔に述べてくださると助かるんですが・・・」

「お主はなかなか愉快じゃの〜。どれ、異世界にでも行ってみんかね？」

テンプレキタ

(。。

!!!!!!

「いきなりですね、返事はもちろんおkです。で、何か特典付けてくれませんか？」

「うむ、良いぞ。何が欲しいんじゃ？」

「俺の知ってるアニメ・マンガ・ゲーム・小説に出てくる全ての技と魔法、特殊能力、精霊・モンスター等の召喚能力をリリース。あ、あらゆる言語と文字が理解できるようにしといてください。当然不老不死で魔力とかもMAXで。それと、特殊能力に関しては俺に不利益なやつは除外、特殊能力のON/OFFの切り替えも可という

ことで。ああ、それから超演算能力も付けといてくれ」

「ずいぶんと欲張ったもんじゃの〜」

当然だ。

生半可な能力で満足する俺じゃないぜ！

「貰えるものは貰っとくに限りますよ。で、その世界でやりたい放題してもいいんですか？」

「うむ、基本自由にしていどうぞ。それこそ、そのチート能力でいかなる暴虐の限りを尽くそうとも・・・じゃ」

よし、お墨付きget！
神様G」。

「で、お主はその力で何をするつもりじゃ？」

「ん〜・・・俺の気分次第で」

二トになるもよし、冒険するもよし、世界征服するもよし、10年ほど寝るのもよし、ハーレムをつくるもよしだな。

まあ、そんなことは寝てから考えるかね。

不老不死なんだから時間は有り余っているしな。

「ま、やりたいようにやればええじゃろう。好きにするがええ」

話の分かる神様でよかったぜ。

「ついでに異世界に渡る門ゲートを創る能力もください。それもリアルじ

やない異世界にも可能な」

「異世界に渡る門ゲートとな!？」

「はい、まだ見ぬ世界にも行ってみたいですし、マンガやアニメに出てくる世界にも介入してみたいですしねえ」

神様はしばらく考えたあと笑みを浮かべる。

「やはりお主は面白いのお。いいじゃろ、その力を授けよう」

さすが神様、太っ腹だ。

「こんなもんでいいかの？」

「ええ、色々とありがとうございました」

「うむ。なら次の人生を楽しむとええ」

神様がそう言うと、俺の意識は闇に包まれた。目が覚めるのが楽しみだぜ!

プロローグ チートっていいよね（後書き）

色々やりたい放題できるようにと主人公の能力をカオスにしました。まあ、本当のところは、何か良いアイデアが思い浮かんだときそれをすぐ書けるように・・・つまり、行き当たりバッタリということになります。

第1話 世の中ノリでいいんじゃないかね？（前書き）

なんか色々と適当だ・・・。

第1話 世の中ノリでいいんじゃない？

「ん〜・・・ここは？」

気がつくところこそ森の中だった。

あ〜そうだった、俺死んで異世界に来たんだったな。それにしても、

「なんで森の中なんだ？虫とかキモいんですけど」

まあ、いきなり現れたら不審者と思われるからな。

そこらへん気を使ってくれたんだろう。と、善意的に解釈しとくか。

「ん？なんか来るな」

複数の気配が俺に迫ってくる。

なんだこいつは、狼か？

数は三匹。

敵意満々である。

ふっ、チート状態の俺を襲おうとは愚かな！

剣のサビにして・・・あ、剣とか無いや。手ぶらだ。

ちよつと厨二状態になってるな俺。

とりあえず魔法とか試してみるか。

「デルタレイ」

三つの光球が現れ狼たちを光が打ち抜く。

狼たちは倒れ伏した。

* * *

ここ南トリエラ大陸には数十の国家が存在し、大陸北西部のラーメア王国、大陸北部のフラメル王国、大陸中央部の宗教国家キュプロス神聖国、大陸東部の南トリエラ大陸最大国家パラメイア帝国、大陸南東部のフォレント王国、大陸南部の海軍大国アマルダ王国、これらを六大国といい、つい数年前まで大陸の覇権を争っていたんだと。南西部ザーメア地方には小国家群が乱立し争いが絶えないらしい。ちなみに、ラーメア王国・ザーメア地方西の対岸にはコルネオ王国という島国があって、アマルダ王国に匹敵する海軍力があるとか。うん、島国にとって海軍力は必須だよな。俺も日本出身だから良く分かるよ。

宗教国家のキュプロス神聖国とは関わり合いたくないな。異端審問とか普通にやってるらしいし。

まっ、もしなんかあったらこのチート能力でポッコポッコにするけど。手加減？しないよ。

仮にそうなたらチハたん量産して攻め込むから。

で、俺が今いるのはフォレント王国のレニールという町らしい。

フォレント皇国は自然の豊かな歴史ある国で、六大国の一角だそう
な。

この世界の通貨は・・・銅貨（青銅貨、黄銅貨、白銅貨）、銀貨、
金貨、白金貨の四（六）種類。

日本円に換算すると、

銅貨・・・（青銅貨・・・10円、黄銅貨・・・100円、白銅貨・・・1000円）
銀貨・・・1万円
金貨・・・100万円
白金貨・・・1億円

つてとこか。

ちなみに1円に値する通貨はない。

だから、地球で138円の物があつたとすると、この世界では黄銅貨1枚、青銅貨4枚（140円）となる。

つーか、白金貨なんて誰が持つてんだよw

ぜつてー王族貴族か一部の豪商ぐらいしか持つてねーだろ！

まっ、創造能力さえあればお金に不自由することはねーしな。

とりあえず銀貨を100枚ほど創つておくか。

他は・・・剣でも創るか。

実際、剣とかなくても十分っぽいんだけど、剣で戦うとか男のロマンじゃね？

しかも、日本人なら当然刀でしょ。

パンツと手を合わせ鋼錬風に刀を創り出す。

刀には対魔法コーディングも施しといた。

これで魔法を切り裂くことが出来るぜ。一度やってみたかったんだよな。

等価交換の原則？

そんなの無いに決まつてんじゃん。

雰囲気こそ鋼錬だけど、これ『錬金術』じゃなくて『創造』だけ。

「こんなもんかな？」

防具はいらないのだった？

あんな動きの邪魔になりそうな付けてられるかって話。

あと、汗臭そうだし。

学校の体育の授業で剣道の防具付けたときでさえあれだけ嫌だったのに。

あの臭さはねえわ。

これからどうしようか・・・。

王都にでも行ってみるかね。

嫁を探しに。

俺はすぐそこにいたおっちゃんに声をかける。

「王都ってどこらへんにあります？」

「王都かい？この町から東だよ」

東ね、転移で一気に行ってもいいけど、歩いていくのもいいかな。でも、歩きだとすぐ飽きるしな。

そうだ、馬車で行けばいいんだ！

早速、馬車を創るらねば。

馬は『創造』で創った特別仕様の馬を用いる。

手綱をとるのも面倒であるし、体力面の問題でずっと走らせっぱなしというわけにもいかない。

その点、『創造』で創った特別仕様ならば問題は無い。

その後、馬車を『創造』した俺は観光気分です都へと向かった。

第1話 世の中ノリでいいんじゃない？（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

第2話 ミナとの出会い（前書き）

睡眠学習装置だれか発明してくれないかな？。

第2話 ミナとの出会い

どうも、異世界に来ちゃった霧島大和です。

現在、王都を目指して馬車に乗っています。

やっぱね、異世界っていったら馬車ですよ。

転移魔法で一氣に移動とか風情に欠けますよ。

馬車でゆつくりと旅を楽しんでこそその異世界です。

そして、この馬車を曳く馬の名前はウラヌス。

最初、名前をカフアルーにしようと思ったんですけど、良く考えたらあの馬は魔神であり魔獣たちの王のため、ここでその名を使うのは時期早々、というか後でカフアルー自体を『創造』か『召喚』するつもりですしね。

それで試行錯誤の結果、硫黄島で戦死された西竹一陸軍中佐にしたけいち（死後大佐）の愛馬ウラヌスの名前を付けることにしました。

このウラヌスは『創造』で創りだした馬でチート仕様。

三国志で有名な赤兎馬をも上回る体力と自動車に匹敵する速力があり、頭もいいので手綱を握る必要もない。それに口から火とかも吹きますしね。

もう馬の領域を通り越して魔物ですね。

「はあ・・・はあ・・・ちよつと待って」

ん？

今何か少女の声が聞こえたぞ。

俺はウラヌス（馬の名前）を止め、声のした方を向く。

と、一人の少女が走ってきた。

おお、なかなかの美少女だ。

「この馬車って王都行き？」

王都行きだけど、仮に違っても王都行きに変更するけどね。

「そっだよ」

「なら、乗せてもらってもいい？」

べつぞべつぞ、美少女なら無条件でokですよ。

「いいよ」

「ありがとう、私はミナ・アーデ。よろしくね」

やべっ、かわいい。

「ああ、俺は霧島大和。こちら風に言つとヤマト・キリシマになるかな。そっちはミナでいいかい？」

「いいわよ、私もヤマトって呼ばせてもらつから」

「ok。よし、行けウラヌス」

「手綱とらなくていいの？」

「ああ、ウラヌスは手綱なんてとらなくても勝手にやってくれる名馬だ」

ミナは目を丸くする。

ま、そっだよね。

普通そんな馬いないよね。」

「それで、ミナは王都へ何しに行くんだ？」

「王都にある魔法学校に入りたくてね。まあ・・・入学試験は厳しいらしいけど、私、魔法使いになりたかったから」

魔法学校か・・・うん、ファンタジーものの定番だな。

「へー、魔法学校か。面白そうだね」

「ええ、他国からの留学生とかも多いのよ。魔法の最も進んでいる国家はパラメイア帝国だけど、あの国の魔法学校は閉鎖的で自国民しか入学できないから」

ま、そうだろうな。

パラメイア帝国は大陸最大最強の大国で大陸一の魔道国でもある。だが、国力は他の六大国を大きく突き放しているわけではない。

二国以上と渡り合うのはさすがに厳しいはずだ。

ならば、切り札といえる魔法の優越をおいそれと他国に分け与えることはしないのも道理というものだ。

さて、パラメイア帝国の魔法学校ではなく、ここフォレント王国の魔法学校のことだったな。

幸い、俺は16歳（もう少しで17）。

年齢的にはまったく問題ないはずだ。

後は入学条件だが・・・

「誰でも入れるの？」

「ええ、試験をパスすれば誰でも」

「なら俺も試験受けてみようかな」

俺の魔力は無限に等しいから魔力測定は楽勝だし、筆記があるなら『神の眼』を使えば済む。

最悪、ギアス使っちゃえばいいじゃないか。

うん、何の問題もないな。

「えっ！？普通の試験と違って魔力測定があるのよ。というか、あなた魔法使えるの？」

「もち。ところで、魔力測定ってどれだけ魔力が有れば合格？」

「魔力値1000というのが最低基準。150有れば確実に安全圏で、200以上なら筆記免除よ」

なるほど、2000以上で筆記免除なのは素質のある奴は是非とも入ってほしいからだろう。筆記だけいくら高得点でも仕方ないからな。ミナの魔力はどのくらいなのかな？

『神の眼』で探ってみるか。

魔力：202

おお、ギリギリだけど合格確定の数値じゃん。
ん？

そういえば、この世界の魔力基準はどうなってるんだ？

『神の眼』で調べてみるか。

・・・ふむふむ、300以上あれば優秀で、400以上で高位魔法使い、600以上で大魔道師クラスか。1000越えの賢者なんて歴史上の人物じゃん。

逆に100に満たなければ素質・・・というか適正が無しか。

なら、とりあえず試験時は255でリミッターを掛けておくかな。

リミッター無しだと大騒ぎ起きそうだし。

よし、王都に着くのが楽しみだ。

* * *

「ほ、ここが王都か」

あれから、道中何事も無く王都に着いた。

そう、何も無かつたんだよorz

途中で盗賊に襲われて、俺が華麗に撃退。ミナの高感度upとかいうイベントも当然無し。

マジねえわ、空気嫁よ盗賊ども。

この文明レベルなら絶対いるはずだろ？

こういう時に襲ってこないで何のための盗賊だよ。

別に盗賊でも海賊でも山賊でも空賊でもいいけどさ。

本当にクズだなあいつら。

それにしても、東京とか見慣れてるせいか大都市とか言われても実感ないな。

確かに街の規模は大きいんだけどね。

高層ビルが無いからかな？

まあ、地球の中世ぐらいのこの世界ならこれでも大都市なのかな。

「予定より早く着いたわね」

馬車曳いてたのウラヌスだしな。

「そういえば、学費とかつているのか？」

「あ！そういえば・・・魔力が250を超えていれば学費免除なんだけど・・・」

ミナはこの世の終わりみたいな表情をしている。
学費のことをどうやら忘れていたらしい。

ミナの魔力は202、学費免除は無理そうだな。

あ、目に涙が浮かんできた。

この様子だと手持ちじゃ足りなさそうだな。

・・・ふっふっふ、だが、これはフラグを立てるチャンスだ。

くく、運命の女神は何処にいるか分からないものだな。

「心配ないよ」

「え!？」

「俺が学費出すから」

「そんな、悪いわよ」

「いって、嫌みな言い方になるけどお金なんていくらでもあるし」

そう言って俺は10枚ほどの金貨をミナの手握らせる。

「これは、金貨がこんなに・・・」

「これで足りるかい？」

「じゅ、十分すぎるぐらいよ。金貨四枚あればお釣りがくるわ」

ふむ、学費は日本円にして三百万超か。

「なら良かった。あとは試験に合格するだけだな」

二人とも合格は確定してるしな。

万一、落ちるようなことがあってもギアスで（ry

「でも、このお金は受け取れないわ」

「いいから取っておけて。俺にはまだまだあるから」

そういつて俺は数枚の白金貨を見せる。

「・・・」

あ、ミナが固まった。

あゝ、そういえば白金貨って一部の人間しか持ってないんだっけ？

・・・まあいいや、後でミナに口止めしとこ。

さて、ミナが現実に帰ってきたら飯でも食って宿を探すとするかね。

第2話 ミナとの出会い（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

第3話 試験当日だけど結果は最初から分かってるしな (前書き)

最近いいネタが浮かばない・・・浮かんでも話的にそうとう後のやつになるorz

第3話 試験当日だけど結果は最初から分かってるしな

「ん〜良い天気だな。まるで俺の合格を祝福してるようだぜ」

はい、というわけで今魔法学校にいます。

何でかって？

今日は魔法学校の試験日だからさ。

いや〜、最初から合格が確定してるってのは気持ちがいいね。

お、ミナはいつになく緊張してるな。

ま、仕方ないわな。

この先の人生の分岐路の一つなんだから。

.....

やはり先ずは魔力測定からか、魔力が1000あるかどうかで篩ふるいにかけるわけだ。

ほ〜、意外に魔力が1000に届かないやつも多いみたいだな。

入学は簡単じゃないってことかね。

ん、そろそろミナの番か。

「おい、次ぎミナの番じゃね？」

「ひゃい!？」

緊張で声が裏返ってるよ。

こっぴつミナも可愛らしいな。

「ほら、大丈夫だから行って来い」

ミナの頭をくしゃくしゃしてあげ、緊張を解^{ほぐ}してやる。
これ別に筆記と違って緊張とか関係ないんだけどなんとなくね。

「あ……え、ええ」

そうやってミナは測定しに向かう。

そして、測定球に手をかざし、祈るように目をつぶる。

「ミナ・アーデ、魔力……202」

歓声がそこらじゅうから上がる。

ま、今のところ200超えたのミナだけだからな。

ミナ自身、信じられないようで「え？えっ？」と驚きながら首をキョロキョロさせている。

「私……合格？」

「ああ、200超えてるから筆記免除で合格だ。おめでとう」

「あ、ありがとう／＼」

礼を言いながら顔を赤らめるミナ。

やっべ、萌える。

お持ち帰りしてえ〜。

「ミナ、結婚しよう！」

「ちよ、ちよっと、何言ってるのよ／＼」

「いや何か顔を赤くするミナが可愛かったからお持ち帰りしたいな
ーと」

「ば、バカなこと言ってないで、そろそろあなたの番でしょ」

ち、良い所で俺の番が回ってきやがったか。
順番決めたやつ空気嫁って感じた。

で、俺はさっさと測定を終わらせた。

結果？

当然255で合格だよ。

ミナを含めた周囲はメツチャ驚いてたな。

なんでも、新入生で250を超える者は稀まれなんだってさ。

200以上で特待生だからね。

そんなところかな？

・・・

まあ、そんなのどうでもいいや。

考えるだけ面倒だ。

眠くなってきたし（ 注 まだ昼頃です）。

さて、他のやつらはどうなるかなって。

* * *

ようやく終わったか。

結局、魔力が200を超えたのは俺とミナを含めわずか4人。

200超えの他の2人は両方とも女性で、リア・コンテランス、ティア・クレール、という名前だった。

リア・コンテランスの魔力は233。

ティア・クレールの魔力は、なんと251だった。

ふむ、この二人なんとなく高貴な感じがするんだよな。
なんていうか雰囲気か。

両方とも貴族の家柄らしいが……。

よし、『神の眼』で調べてみるか。

……

リア・コンテランス……本名リリアーナ・L・アマルダ

アマルダ王国第三王女

15歳

処女

ティア・クレール……本名エルティア・リ・パラメイア

パラメイア帝国第一皇女

16歳

処女

おいおい、両方とも王族かよ、こりゃ大物が出てきたな。それも偽名まで使って。

ていうか、ティア・クレールの方は魔道大国パラメイアの皇女なん
だろ。

なんでこんなところに居るんだよ？

パラメイア帝国の環境からして、そもそも学校なんて通わないか入
るとしても帝国内の学校ということになるはずだ。

これは、政治的な何かが絡んでるな。

あ？

何で処女まで調べてんのかって？

そんなの知らんわ。

『神の眼』使ったら勝手にそこまで分かっちゃまったんだよ。

俺の趣味、てか性癖？

いや、俺別に処女かどうかなんて気にしないし。

まあ、年増は嫌だけどな。

もちろん、あの二人は俺のストライクゾーンに入ってるよ。
容姿もバッチシだし。

あとは性格だが・・・。

それは追々知っていくとしよう。

同じクラスになるよう教員どもに暗示を掛けとくか。

「ヤマト、手続き完了したみたい」

「ん？ならもう帰っていいのか？」

「いいみたいよ。あと、学費本当にありがと」

「いって。そういえば、生活費はどうするんだ？足りないなら俺出すけど」

「それならギルドで稼ぐから大丈夫」

ギルドだと〜！

それってあれか？

異世界ものの定番のギルドか！？

「ギルド？」

「ええ、ギルドにある依頼を受けてそれを達成すると報酬が貰えるの」

キタ (。。(ツ！！

ギルドだよ！

あのギルドだよ！

すごくね？

異世界バンザイ！！

「今から行くの？」

「近々行くわ。とりあえず明後日の入学式を終えてからね」

ちえ〜、今行かないのか。

ま、焦って行く必要はないしね。

どうせ近いうちに行くことになるんだ。
俺だってそれくらいは我慢するぞ。

さて、もうここに残ってる意味は無いしミナと食事を取ってから宿
に帰って寝るかね。

第3話 試験当日だけと結果は最初から分かってるしな(後書き)

ご意見・ご感想お待ちしております。

第4話 入学式は寝るに限る(前書き)

単位はヤバい、就活もヤバい。 どうしたものか……。

第4話 入学式は寝るに限る

あゝ、メツチャ眠い。

このまま一生寝ていて〜〜。

・・・

あ、どうも霧島 きりしま 大和 やまとです。

今日は魔法学校の入学式ですね。

みなさんさぞ浮かれていることでしょう。

しかし私は違います。

むしろ逆です。

もうね、お偉いさんの長話を延々と聞かされると考えただけで鬱になりますよ。

何でお偉いさんはあんな長々と喋るんでしょうね？

短く・簡潔に喋ってくれば、みんなちゃんと聞くのに。

なんでそんなことも分からないんでしょうかね？

あんな長々と喋られると、こちらはいい迷惑ですよ。

もつとも、聞く気なんてさらさらありませんが。

ええ、寝ますよ。

中学校の卒業式も高校の入学式も爆睡していた（それも教員席のすぐ目の前で）私に長話地獄など通用しません。

と、話が逸れましたね。

まあ要するに面倒だということですね。

・・・

ところで、俺は誰に話しかけているんだろう？
そもそも何故話しかけた？

ああ、なんか理解した。

て言うか今、夢から覚めたわ。

ま、基本的に起きてても二度寝しちゃう俺だから一時的に自然に目覚めたところですよ。夢の中なんだけどね。

目覚ましとかで無理やり覚醒させれば別だが。

そして、この世界に目覚しなんて物はない。

俺なら創れるけど創ってない。

創る気もない。

ということとは、俺が完全に起きた時は、入学式に遅刻どころか終了してる時間帯になるな。まあ、ミナが起こしてくれるだろ。

て、わけでお休み〜zzzz

「ヤマトー、そろそろ時間よ〜」

マジで！！！

ちよつと二度寝しようとしたところなのに。

仕方ない、起き・・・無理だ、この眠気に抗うなんて無理！！

第二次世界大戦で日本がアメリカに勝つぐらい無理だ。

うん、無視して寝よう。

「ちよつと、起きなさいつたら」

うおお、なつ何だ！？

「ぐはっ!」

どうやらベッドから落とされて床に叩きつけられたみたいだ。

「はい、おはよう」

くそっ、俺の睡眠を邪魔したばかりか床に叩き落とすやがって。

O S H I O K I だ!

「秘儀、旋風^{つむじかぜ}!」

俺の手から放出された風がミナのスカートを捲り上げる。

「なっ!」

驚きながら顔を真っ赤にするミナ。
カワエエのう。

「なにすんのよっ!?!?!」

ボゴッ!

「ぐはあ!」

ドカッ!

「がはっ!」

バキツ！

「……」

ま、マジで今のは洒落にやらん。

っーか変な音したよね今。

俺じゃなきゃ死んでるぞ。

「ハアハア、まったく……今日は入学式なんだからちゃんとしなさい」

そう言っつてミナは部屋から出ていく。

うーん、これってシンデレレ？

いや、少し違うか。

……さて、準備でもしますかね。

* * *

ミナ

魔法学校の入学式が始まった。

学長らしき人物が長々と話している。

私の横には、ヤマトが立ったまま寝るといっ、器用なことをしてい
る。

まったく、この男は……。
緊張感とか無いのかしら？……。無さそうね。
試験の時だってまったく緊張してなかったし。
しかも、魔力は学年トップ。

……。なんか考えてたらムカついてきたわ。
一発殴ろうかしら？

！？

この視線は？

私……。いや、ヤマトを睨みつけてる。

彼女は……。確か魔力値200超えの一人。

名前はリア・コンテランスだったわね。

でも、何でヤマトを睨んでいるのかしら？

心当たりは……。あるわね。

彼女の魔力値はヤマトに劣っていた。

それを妬んでいる？

ヤマトがどうなろうと別にいいけど、一応あいつは私の恩人だ。
何かあったら目覚めが悪い。

注意が必要ね。

* * *

大和

入学式が終わって目覚めたら、ミナに

「立ったまま寝るなんて器用なことしてんじゃないわよ」
と怒られた。

なので俺は言っちゃった。

「いや、入学式ってのは寝るものだろ？」

常識(?)だよな。

「そんな変人あんなだけだったわよ」

ふっ、甘いな。

俺にそれは褒め言葉だ。

「そんな褒めなくても」

「褒めてない」

これは・・・ツンデレだな。

「ツンデレですね。分かります」

「死ね」

「痛っ、ちょ、そこは、グハア！」

・・・俺はボコボコにされた。

「まったく、バカなこと言ってないでさっさと行くわよ」

これからギルドに登録に行くんだっただか？

『面倒、後は任せた。俺は寝る』と言いたいが・・・。

ここは空気読んで大人しく従つといたほうがいいか。

あゝネットゲしてゝ。

第4話 入学式は寝るに限る（後書き）

前回の投稿から三ヶ月か・・・。

第5話 ギルド？リアルでモンハンかよ！

「ここがギルドか」

俺達は今、ある建物の前に来ている。

『傭兵ギルド連盟本部』

それがこの建物の名だ。

そう、俺たちは傭兵ギルドに登録するつもりでここにいる。

学費はすでに払ったとはいえ、やはり貧乏な学生は何処かでお金を稼がなければならぬ。

そこで、魔法学校の学生が多様するのがこの傭兵ギルドだ。

つか、学生なので休日しか働けないからここ以外に稼ぎ口が見つかり難いというのもあるが。

ギルドと一口に言っても様々な種類があり、このギルドは傭兵ギルドである。

傭兵・・・と言っても、地球における傭兵とは少々違う。

いや、地球の傭兵＋ 的なものと言った方がいいだろうか？

雇われて戦争に参加したり、個人や施設の警護に付いたり、賊を討伐したりというのは地球と同じだが、この世界の傭兵は魔物の退治や素材集めなどの依頼をこなす。

これは時代の流れによって追加された特製で、戦争のない時代に付加されたものだ。

仕事（戦争）の無い傭兵なんて賊に身を落とす可能性大だ。

それに、魔物の退治は魔物が生息するこの世界では特に重要なことであり、素材集めに關しても、依頼されるのは大抵、魔物の爪や牙、皮など一般人では購入する以外に入手しにくいものである。

傭兵ギルドとはこれらの斡旋所のようなものである。

まあ、ハローワークみたいなもんだと思ってくれればいい。

他にも、魔物の爪や毛皮の買取りとかもしてくれるが。

そして、危険度の高い依頼をあまり腕の良くない者が受けても無駄に命を散らすだけである。

しかし、この程度ならまだいい方である。

商隊の護衛に数人の自称腕利きを雇ったが、魔物が襲来（それほど強力な魔物ではない）すると彼等はビビって守るべき依頼者を放置して逃走。依頼者を含め多くの人命が失われるというケースもあった。

そのようなことを避けるため、ギルドランクというものが設定されている。

これは、自分の実力以上の依頼を受けさせないための処置である。

ギルドランクは、

G < F < E < D < C < B < B B < A < A A < A A A < S < S S < S
S S < M

となっており、自分のランクと同等の依頼まで受けることができる。つまり、Bランクなら危険度Bの依頼まで受けることができるというものだ。

G、Eが初心者、D、Cが中級者、B、B Bが上級者で、A以上が

最上級者、Sランク以上は規格外、Mランクは伝説レジェンドというのが一般的な見方だが、BBランクとAランク・・・上級者と最上級者の間にはかなり高い壁があるそうなの。おそらく、この壁は才能の壁だろう。もつとも、その中々いないAランク以上でも実力の違いが明確だったりする場合がありますので、AAとAAAとか細かく分けられてたりする。

話が少し逸れたか？

それで、Aランク以上についてだが、Aランク以上は大陸中を探しても二桁にもいかない。Mランクは名誉称号みたいなもので歴史上で活躍した勇者ぐらいたとか。

Sランク～SSSランクも、勇者・・・とはいかなくても戦争や最上級（S級）の非常に強力な魔物との戦いで活躍した英雄的人物しかなれないらしい。

魔物がいる関係上、戦争で男手の人的資源を多く失うのは得策ではないため（女・子供・老人だけでは下級の魔物にさえ狩られてしまう危険性がある）大規模な戦争なんて滅多に起こらないし（数年前に終結した七力国戦争と常に紛争が絶えないザーマ地方は例外として）、S級の魔物なんて個体数は片手で数えられるぐらいしかおらず、普段は洞窟の最下層や樹海の奥深く、険しい山の頂上に引き籠っていて、人前には滅多に姿を現さない。

つまり、平時ではSランク以上になることは絶対無理なことだ。

S級の魔物を狩ろうとするやつがないのかつて？

S級魔物の実力は天災規模だぞ。

大人しくしているのを下手に突っついて暴れられたらどうすんだ。樹海とかの奥深くで暴れる分にはいいのかもしれないが、町とかまで出て来られたらたまったもんじゃないだろ？

実際、それが原因で人口の三割を失った国もあったらしい。

S級魔物の討伐が許されるのは、やつらが人里まで出てきたときに限られる。

それ以外のおきに、無意味にS級魔物に挑んだものは処刑となっている。

それも国家反逆罪でだ。

そんなわけで現時点でSランク以上は0。

最高はAAAランクってわけだ。

以上、『神の眼』で調べた情報でした。

まあ、俺にとってはどうでもいい話だがね。

金なんていくらでも（ry

ちなみに、俺たちが傭兵ギルドに登録しようとしてるのはミナの懐ふくがあまり暖かくないからだ。

金なんていくらでも俺が出してやるんだが、ミナ曰くそこまで迷惑はかけれないとのこと。

なので金稼ぎのために傭兵ギルドに登録するのだそうだ。

俺は別にする必要無いのだが、ミナに付きあう形で登録することにした。

実は、リアルモンハンできるかもと密かに期待してたり。

「ヤ・・・ト」

ん？

「ちょっと！ヤマト」

「あ？どうした？」

「どうした？じゃないわよ、なに自分の世界に入り込んでんのよ」

「いや・・・まあ、なんかギルドだな」と

この気持ちが分かるのは俺のような異世界人だけだろう。

「なにそれ？まあいいわ、さっさと入るわよ」

そう言っつてミナは中へ入って行った。

っつて、置いてくなよオイ。

* * *

受付に居たのは若い女性だった。

「え〜と、登録したいんですけど」

「魔法学校の学生さん？」

「はい」

「名前を教えてくださいてもいいかしら？」

「ヤマト・キリシマです」

「ミナ・アーデ」

「ヤマトにミナね。それじゃ、傭兵ギルド概要を説明するわね」

「.....」

「と、いうわけで.....が.....で」

あ？

やべ、寝てたわ。

まあいいか、内容全部分かってるし。

「.....と言っわけ。分かったかしら？」

「なんとなく」

「あんた寝てたでしょうが！」

「そこはほら、ミナが聞いててくれるから」

「こいつは.....」

「あらあら、中が良いのね」

受付嬢がニヤニヤしながら言う。

「なっ！だ、誰がこんなやつと／＼／」

ミナよ、顔を赤らめながら言っても説得力ないぞ。

「手続きはこつちでやっておくから、お幸せにね」

そして受付嬢・・・完全に楽しんでるな。

「~~~~~」

顔を真っ赤にしながら唸っているミナ。

おお、これは萌える。

お持ち帰りして〜。

「ヤマト、さっさと帰るわよー!」

そう言っただけで急ぎ足で出ていくミナ。

俺も後をついていく。

扉を閉めるとき、受付嬢の「がんばってね〜」という声が聞こえてきた。

やっぱりあんた楽しんでんだろ。

さて、俺を置いてどんどん先へ進んでるミナを追いかけるとしますかね。

第5話 ギルド？リアルでモンハンかよ！（後書き）

就活が~~~~、就活が~~~~。
もう疲れたよパトラッシュ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5901n/>

異世界乗っ取り計画

2011年9月9日10時50分発行